精霊地界物語 2



目次

第二章 空 聖女姫 第二章 夜のはじまり 第二章 反逆の狼煙 クエスト達成

269 182 122 58 7

第一章 聖女婦

笑みを浮かべてさらりと言った。 ろう。迷宮から出る理由を問われ、 緊急クエスト中にもかかわらず迷宮から出ようとしていたエリーゼたち一行を不審に思ったのだ ルジス王国の王都迷宮。その出入り口には、冒険者ギルドから派遣された職員が立っていた。 エリーゼはぎくりとする。だがパーティの一人であるジュナは

会の影響力が強いこの国から逃がすためだった。 「外で身体を洗いたいんだよ。あたしとエリーゼは女なんだし、数日に一回ぐらいはね」 もちろん嘘だ。本当はクエスト中に魔族である疑いが浮上したエリーゼの弟リールを、 精霊神教

精霊神教会に知られれば、彼の身に危険が及ぶ。事は一刻を争う。そのためエリーゼとジュナは、 リールを連れて迷宮を出たのだ。 リールが本当に魔族なのか、すぐに確かめる術はない。だが万が一、 魔族だった場合、それを

たが、ジュナがしつこく訴え続けてなんとか説得に成功した。 本来、今回のような強制クエスト中の離脱は認められない。 職員はなかなか首を縦に振らなかっ

迷宮の門をくぐりながら、ジュナは肩を竦める。

く街を出なきゃね」 の冒険者より強いから、今も多分ギルドの監視がついてるよ。そいつらに止められないよう、 「あたしたちは迷宮に隔離されてるようなもんだからね。 特にあたしと魔法使いはそんじょそこら 素早

8

冒険者ギルドは警戒しているのだろう。 ずれも凄腕なので、 今王都を騒がせている悪霊が憑いたら王都に大きな被害が出てしまう。それで、、一緒に冒険をしていたパーティのうち、リール、タイターリス、ジュナはい

けだった。 ものといえば、 アンタジー世界に準男爵令嬢として転生した。といっても剣や魔法の才能もなく、持って生まれた 元々日本で普通の女子高生だったエリーゼは元の世界で突然何者かに殺され、 この世界の言語を誰にも教わることなく読み書きできる能力と、 いくつかの恩恵だ この剣と魔法のフ

に精霊の呪いと呼ばれる、持ち主にとって迷惑でしかない恩恵まで授かっていた。『『恵恵とは、この世界において精霊から稀に授けられる特殊能力のこと。だがエリーポット ゼの場合は俗

能性が高いと言い出したのだった。 ていたのだが、途中で【人助け】という特殊な恩恵を持つタイターリスが、 【胃弱】【美貌に弱い】という二つの精霊の呪いをどうにかする手がかりを探るため、 リールは魔族である可 迷宮に入っ

ルは怪訝な顔でジュナに問う。

「ボクがまだ成人していなくて一人では街から出られないので、 ジュナがついて来てくれるという

「いくら払えばいいですか? その言葉を聞いて、エリーゼは自分の身体を見下ろした。 最近大きな買い物をしたので、 新品のプレー あまり多くは払えませんが」 ١ 陽の光を反

射して銀色に輝いている。 「大きな買い物って、もしかして私の鎧?」

「姉さんが気にすることではありません」

エリーゼの鎧を見て少し微笑んだリールを横目に、ジュナは溜息を吐いた。

別に金はいらないよ。それよりも、 あんたたちとの縁が欲しいね」

ルは眉根を寄せて言った。

「あんたが本当に魔族だってんなら、 繋がりを持ってるだけできっと利益になる」

「……ボクは、自分が魔族だとは思えないんですが。 ボクが魔族かもしれないと言った時 Ó

ターリスの様子は確かに普通じゃなかったですけどね」

「様子がおかしかったのは、 あんたもだよ」

ジュナはにやりと笑った。

寒気がしたんだから。 は、教会が言う『人間を堕落させ、魂を奪「エリーゼが悪霊に憑かれた時のことさ。 まぁいくら悪霊憑きとして処分されるのが嫌だからって、 魂を奪おうとする』悪魔そのものだったよ。 自分を殺そうとするエリーゼを喜んで煽っていたあんた あたしは見ていて 血の繋がった弟を

手にかけようとしてるエリーゼも、 かなり悪魔っぽかったけどね」

「……確かに普通じゃないかもしれない。だけど私は人間です!」

「あんたにはギルドカードがあるから、それははっきりしてるもんね」

族がわかるのだが、 ことはできない。だからエリーゼは自分の種族が人間だと知っていた。 市民カードや各ギルドのカードには、 未成年なのでまだカードを作れないのだった。 精霊によって持ち主の種族が記載されており、 リールもカードがあれば種 それを偽る

いない。だがそれより強く感じるのは、 ら緊急クエストの真っ最中のはずなのに、こんなところを歩いているので不思議に思っているに違 「監視が三人に増えてる」 街を歩いていたエリーゼは、 通行人の視線を感じた。 明確な意図をもってこちらを見張っている者たちの視線だ。 鎧を身につけているからだろう。 冒険者な

エリーゼが呟くと、リールが口を開いた。

「ボクたちが東門から街の外へ出たら、 姉さんは大人しく彼らに捕まってください

うん。どうせ逃げられないしね」

「そしてギルドマスターに、 迷宮から出た理由を正直に話してください。 他の人に言ってはい

「子供じゃないんだから、 わか ってる う 7

「でも姉さんは肝心なところで大ポカをやらかすタイプですから」

ルってば、 ひどい!」

「あんたたち、のんびりしてるねえ」

ジュナが呆れたように言い、リールは肩を竦めた。

ひと気のない場所で、 リールは足を止め、エリーゼに向き直った。

「ギルドマスターに話したら、次は兄上と姉上に報告してください」

「ハイワーズ家に危険が迫っていると伝えれば、 「お姉さまはともかく……エイブリーお兄様やステファンお兄様を呼び出すのは難易度高いよ」 すぐに集まりますよ。 父上に……と言えば、

にいたって飛んできます」

上げた。 犯罪者を収容している監獄塔が見えてくる。 住宅街を抜けると、完全に人通りが途絶えた。 それをちらりと見てから、 街の東の外壁沿いにある、 リー 貴族などの身分が高 ルは灰色の曇り空を見 V

いきなり殺そうとする可能性もゼロではありませんから」 さんは確実に人間ですが、 「ボクが本当に異種族だとしたら、 注意だけはしておいてください。 ハイワーズ家の誰かが同じく異種族かもしれないわけです。 精霊神教会が、 それを確かめもせずに

リールの緑色の瞳がエリーゼを捉える。 エリーゼもリールを見つめ返した。

の国では人間以外の種族が存在することは、許されないんですよ」 「もしも一家の中に異種族がいると知られたら、 ハイワーズ家は窮地に立たされます。 姉さん、 ح

「……知ってるよ」

「まだタイターリスの勘にすぎません。 根拠はどこにもない。 だから調査の手が伸びる前に、 ボク

ろう。 ずなの やがて三人は、 やけに血なまぐさい雰囲気があって近づきがたい。 街の東端にたどりついた。そびえ立つ黒灰色の外壁は南や西にあるものと同じは すぐ外に絞首台と墓地があるからだ

さい」 ませんが、 「……尾行者たちが、 念のため門は一気に駆け抜けましょう。 かなり近づいてきているようですね。彼らにボクたちを止められるとは思え ジュナはギルドカードを用意しておい

「ああ」

「リール」

エリーゼが声をかけると、 リールは振り返って小首を傾げた。

「十五歳になって何かのギルドでカードを作って、 人間だとわかったら、 帰ってきてね

今は出られないけどどうにか出られる方法を探すか

ら、待ってて!」 「私がこの国を出て、 リールのところへ行く。

「もしも人間じゃなかったら?」

「街からも出られない のに? ……まあ頑張ってください

「でもリールだって、 この国から出られないかもしれないんだよ?」

エリー ゼは街を出ようとすると血を吐いてしまう。それは母アイリスを加護する精霊のせい では

を叶えるために精霊が邪魔しているのではないかと。本当にそうだとしたら、 リールが以前推測していた。 アイリスが子供たちの遠出を望んでいないから、その願 リールも同じかもし V

がどうしても冒険者をやりたいと言うのなら、その国でやらせてあげますよ」 「そうですね。でも、 遠くの国で二人で暮らすのもいいですね。そろそろ身の程を知るべきだと思いますが、 もしボクが無事に出国できて、いつか姉さんが国から出られるようになった 姉さん

「……その毒舌も、 しばらくお預けだと思うとすごくさみしい」

「やっとボクを見てくれるようになった姉さんと離れるのは、ボクも嫌ですよ

エリーゼと軽く手を振り合うと、 リールはエリーゼに背を向けた。

それを見て、エリーゼの胃がしくしくと痛む。確実に再会できるとは限らないからだろうか

エリーゼがそう思った瞬間、リールとジュナは駆け出した。 門前の兵士はジュナが突きつけるよ

うに示したカードを見て、 あっさり通行を許す。

尾行者たちは「止まれ」と声をあげたものの、 それ以上のことをしようとはしない

そのままリールたちが門をくぐるのを、誰もが見送ってしまおうとした時だった。

エリーゼが膝からくずおれ、 背後にいた女性が悲鳴をあげた。

姉さん!?」

烈な胃の痛みは、 振り返ったリールは血反吐を吐くエリーゼを見て、血相を変えて引き返す。 リー ルが街の中に戻るとすぐに引い ていった。 エリ ゼを襲った強

第一章 聖女姫

げた。 紅に染まっ 7 V る。 エリ ーゼは 口の中に溜まってい た血を吐き出して、 リー ルを見上

14

「リール、 行って

「……ボクが街の外に出た途端、 姉さんが血を吐いたのに?」

「関係ないかもよ。 いいから行って」

はないようですね」 街を出ようとしたボクではなく姉さんに影響が出たことを考えると、 「いや、間違いないでしょう。このままボクが出て行けば、姉さんは血を吐いて、 どうやら母上の精霊の仕業で 悪ければ死ぬ。

リールはエリーゼに肩を貸して立たせると、 門に背を向けて歩き出した。

を追いかけてきた。 尾行していたギルドの男性職員に問い詰められていたジュナは、 それを振り切り、 エリー

「これからどうするんだい?」

「まずは医者に行かなくてはいけません ね

リー ごめん」

「悪いのは姉さんではなく、 姉さんをそんな目に遭わせている精霊ですよ」

傷ついているからか、 エリーゼは再び血を吐き、 リー ルの外套を赤く汚してまた謝る。

こうして、 リールは逃亡に失敗した。

(私が精霊からもらった恩恵**フト 【胃弱】のせいで、 リー ルは街を出られなかった

祝福の力。たとえそれが【胃弱】のようなおかしなものだろうと、 もありがたいことだとされている。 エリーゼはこの世界に転生した時、 いくつかの恩恵を授かった。 恩恵を持っていることは、とていい。とは、精霊からもたらされる。

にとって、 けれどその恩恵が人生を大きく狂わせる時、 そう簡単に解けるものではないらしい。 まさに呪い以外の何物でもなかった。 !。冒険しながら精霊の呪いを解く方法を探している人はそれを精霊の呪いと呼ぶ。【胃弱】はエリーゼ

やがてリールがどこに向かっているのかわかると、 な場所だからだ。 リールの身に危険が迫っている。それなのに逃がしてやれない。エリーゼは内心自分を責めたが、 ほっとした。 その場所は、 リールにとって安全

「医者って、どこの医者だい? い い医者を知ってるなら、 ぜひとも紹介しておくれよ

「後宮の侍医ですよ」

エリー ゼが入ってんのかい?

「ええ。姉さんは妃候補ですから。後宮には腕の良い侍医が常に待機していますが、 貴女が治療を

受けることはできないでしょう」

ジュナが驚いた表情でエリーゼを見る。 なんだか恥ずかしくなって、 エリーゼは俯 いた

地面に視線を落としたまま、エリーゼは考える。

迷宮で何かあったのかと聞かれたら、 異種族を悪魔と見なし、 タイターリスはリ それを殺すことを躊躇わない。 ルが魔族かもしれないと話してしまうだ その精霊神教会の聖女に

16

れている聖女に隠し事ができないからだという。

恩恵のせいで、 彼は今、 タイターリスはエリーゼと同じように、 また、精霊神の加護を持つ聖女からリールのことを聞かれたら、嘘を吐くことはできないらしい。 他の仲間と共に迷宮に残っているが、いずれは出てくるだろう。 人間と異種族が戦っているのを見ると、 精霊の呪いを授かっている。バッドステータス 異種族の方に強い殺意を抱いてしまうのだ。 その 【人助け】という名の

できると思う」 「後宮には、 妃候補の家族を除く部外者は入れない。たとえ聖女でも、 しばらくは遠ざけることが

「場合によっては、 時間稼ぎにもなりませんけどね」

上は何も言わなかった。 リールが溜息混じりで言ったが、 エリーゼは意味がわからず首を傾げる。 だがリー ルは、 それ以

開く」と連絡した。 リーゼは急に心配になった。だが王宮の西側勝手口の警備兵は、彼をあっさり中に入れた。 ジュナを冒険者ギルドに説明に行かせると、 妃候補の家族とはいえ男性なので、 ルはエリーゼを医務室に放り込んだ後、 簡単には入れないかもしれないとリールが言ったため、 エリーゼとリールは王宮 エリーゼの侍女を通じて兄姉に「緊急の家族会議を へ向かった。 工

治療を終えたエリーゼは、

リー

ルと共に自分の部屋に入る。

長姉カロリーナと長兄エイブリ

が

早くもそこにいるのを見て、リー ルは頭を抱えた。

「ここの警備はざるですか?」

妃候補の家族は、 いつでも訪問していいのでしょう?」

「だからといって、 姉上はともかく、男であるボクと兄上を簡単に入れてしまうのはどうかと思

ちなみに、と言って、 リー ルは声を低める

「後宮に入る時、種族はチェックされましたか?」

護する精霊は、妃候補が人間でなくとも気にしていない」 ルジス王国も建国当初は、 「そんなことはされない。 そもそも妃候補たちも、 異種族を排斥しようなどと考えていなかっただろう。 種族のチェックなどされないのだからな。 恐らくこの国を守 アー

ということはあるのでしょうか?」 「では、妃候補として一旦後宮に入ると、 この街を出られないよう精霊によって行動を制限される

どこへでも行けるはずだ」 からだ。以降、妃候補の行動を制限するような決まりは次々と廃止されていった。 「それもない。 後宮が出入り自由なのは、 かつての妃が冒険者として恐ろしいまでの功績をあ 今は国内ならば げた

「では、姉さんを害しているのはこの国を守護する精霊でもないんですね

エイブリーたちの視線がエリーゼに集まる。 ゼは腹を撫でた。 胃の中に、 まだ重苦しい何かが残っている気がして

ボクは調査の手が伸びる前に国を出るつもりでしたが、 せんが、可能性は高いと見ていいでしょう。そしてそのことが、教会に知られる恐れがあります。 「今の状況を簡単に説明します。 ボクは人間ではないかもしれません。 街を出ようとしただけで姉さんが血を吐き それを確認する術はありま

18

「これが血を吐いたところで何だというんだ。 構わず行けばいいものを」

「ボクは兄上とは違います。 姉さんを犠牲にするつもりはありません」

「殺せばよかったのよ」

足を露わにしている。 寝椅子にもたれながら、 カロリ ーナが微笑んだ。 ド レスの裾をしどけなく乱し、 靴を脱い

のに、どうしてそうしなかったの?」 あなたが異種族かも しれないと言った人間がいるのでしょう? すぐに殺せばよかった

「相手はこの国の第一王子ですから」

「ハーカラント殿下か……」

苦々しい表情を浮かべたエイブリーに、 カロリ ナは無邪気な顔で尋ねる。

「王子様を殺してはいけないのかしら?」

バカなことを言わないでいただきたい。 父上に逆賊の汚名を着せたいのか?」

「あら、 それは嫌だわ」

カロリ ナはそう言って肩を竦めた。

工 リー ゼは首を傾げてリール

「いつ王子様に知られたの?」

「タイターリスが第一王子なんですよ

冒険者仲間の名に、 エリーゼは目を見開いた。

「……いやいや、だってタイターリスって名前、 ギルドカードにもちゃんと書いてあったよ?

名は使えないよね? ギルドランクもDって書かれてたし。王子様はBなんでしょ?」

とを言っていましたが。王子としてはBランク、 「あの方はどういうわけか、名前を二つ持っているらしいですね。精霊にもらったというようなこ タイターリスとしてはDランクということなんで

「…..私、 今までかなり粗雑な対応をしてきちゃったんだけど」

「それを咎められはしないと思いますよ。 素姓を隠していたのはあちらなんですから」

「高貴なオーラとか全然ないし」

「姉さんは、 兄上や父上を見慣れていますからね。 特に父上は、 王族よりも血統が良さそうに見え

ますし」

エイブリーは頭を抱えて言った。エリーゼは慌てて口を噤んだが、 お前たち、 王家に対して無礼なことを言うのはやめろ。 ここは王宮なんだぞ」 リールは気にする様子もなく

「王子に異種族だと疑われているボクが後宮に長居するのは得策ではありませんから、 手早く話を

済ませたいのですが……父上は人間なんですか?」

20

「人間でなかったら、何だというのかしら」

カロリーナが目を細めて剣呑な空気を漂わせたが、リー ル は動じなかった。

「父上の種族から、ボクが人間ではなかった場合の種族が推測できます」

出ることすらできないのに」 「推測できたところで、どうするつもり? エリーゼが血を吐くからと言って、 あなたはこの街を

「とりあえずは、 この街のどこかに潜伏する予定です

わたしは伝手を頼って十五歳未満でも種族がわかるようなカードを用意するわ 早く

あなたの種族がわかった方がいいもの」

命はないものと覚悟しておけ」 「俺は今聞いた話を父上に報告し、 今後の方針を決めていただく。 場合によってはリ ル

「ただで殺されるつもりはありませんが、 わかりました」

カロリーナは赤い髪の毛先を弄びながら尋ねた。

「恐らく姉さんの行動を制限しているのは、 一敵は精霊神教会と、第一王子殿下、 エリーゼの行動を制限している精霊と……他にいるかしら?」 精霊神教会の精霊でしょう。この国を守護する精霊で

上を守護する精霊でもないとすれば、 それ以外に思い当たりません」

てハイワーズ家に不利益をもたらすようであれば、 「悪くすると国、そしてステファンも敵になるな。 あいつは教会に入り浸っている。 始末するべきだろう」 教会側に与る

エイブリーはこの場に姿を見せていない、 エリーゼの次兄の名を挙げる。

「ええ。では、ボクはもう行きますね」

「気をつけるのよ。教会に捕まりそうになったら、 自害してね

していたエリーゼは、慌ててリールの袖を掴んだ。 淡々と会話が交わされ、それぞれが納得した顔で、 あっさり席を立とうとする。

少しの間言葉を探した後、 ルは椅子から腰を浮かせかけた格好のまま、 口を開いた。 不思議そうな顔でエリーゼを見る。 エ リーゼは

なく考えてたから」 ルが、異種族かもしれないリールを逃がさないために私を利用したんじゃないかって、 の身体をおかしくしたのが教会の精霊だっていうのは納得できたけど。 「意味わかんないよ。お姉さまたちは人間なの ? それとも違うの ? 人間びいきの精霊神アスピ これからどうするの 私もなんと ?

たが、リールに手で制され口を噤んだ。 カロリーナは、 うっすらと笑みをたたえてエリーゼを見ている。 エイブリー は何かを言おうとし

るけど、どうしてお姉さまもリールも反対しないの?」 そのリールは、 ステファンお兄様を始末するだなんて……。 次の言葉を待つようにじっとエリーゼを見つめている。 エイブリー お兄様がそう言うのはまだわか エリー ゼは言葉を続けた。

それはステファン兄上がハイワーズ家に敵対した場合の話ですよ」

「だとしても、

おかしいでしょ?」

「何が おかしいんですか?」

か、目を眇めてエリーゼを見つめる。 わけがわからないという顔でエリーゼに尋ねた。だがどうにか理解しようと思ったの

22

「ステファン兄上は、 精霊神教会に身を寄せています。 ボクに異種族の疑い があると知 った

会は真っ先にステファン兄上の種族を調べるでしょう。 たのに今ここにいないのですから、 たら、その時点でハイワーズ家は終わりです。そもそもハイワーズ家の危機だと言って招集をかけ すぐにでも殺してしまいたいくらいですよ」 そしてもしステファン兄上が人間でなかっ

「そんな……!」

「ですが、姉さんに家族は大切にするべきだと教わったから、 ボクは暗殺者を送るという提案はし

ませんでした。それだけでは不満ですか?」

「不満って……」

絶句したエリーゼを見て、 力口 リーナはおかしそうに笑った。

「エリーゼは優しいのね。 ステファンを殺そうという話になったら、 あなたは喜ぶと思ったのに」

「喜ぶだなんて、そんな……」

「あなたは忘れてしまったみたいだけれど、 ステファンは昔あなたを殺そうとしたのよ?_

「……私が後宮に入る時?」

後宮に入る直前、ステファンに首を絞められたことは記憶に新し

「そんな最近のことじゃなくて、 あなたが四歳の時のことよ。 あの時からステファンは、 あなたに

殺意を抱いていたの。いなくなったら嬉しいでしょう?

何も思い出せなかった。 エリーゼは思わず自分の胸を押さえた。 心臓が大きな音を立てる。 過去の記憶を探ってみたが、

私とは違って、お姉さまはステファンお兄様と仲が良かったじゃない」 何もしないお父様やお母さまに代わってステファンお兄様のお世話をしてたの、 「全然覚えてないし、嬉しくなんてないよ。 それよりお姉さまは、どうして笑っていられるの? お姉さまでしょ?

「それはつい最近まで、あの子がわたしの【魅了】にかかっていたからよ」

「み……りょう?」

あの子に何もしなくても、 わたしが何もしなくても、 あの子はわたしを慕っていた。 多くの人がわたしに惹かれる。 それでも決して溺れはしなかったあたり ステファンもね。 しが

【魅了】に対する耐性を感じるけれど」

言葉を呑み込みきれず、 エリーゼは唖然とした。

「あなたも耐性があるのよね、可愛らしいわたしの妹。 カロリーナは寝椅子の上で身を起こすと、 固まっているエリーゼに優しく声をかける ただの人間なのに、 誰にも教わることなく

言葉を話したり文字を読んだりできたのも、 本当に不思議よねえ」

言葉を続けた。 を姉に知られていたことに驚き、 エリーゼは目を瞠る。 力口 IJ ナはい かにもおかしそうに

はその頃、 騎士学校に行っていたから、 そのことをあまり知らない のよ。 けれどわた

四歳の時ステファンに殺されかけて以来、 知っている 五歳の時のあなたは、 ステファンに対する興味をすっかり失ってしまったみた 九歳のステファンよりも、 よほど役に立っていたわよね

24

だから、自覚はなかったでしょうけど」

身体が我知らず震え出して、エリーゼは全身の産毛が逆立つような感覚を覚えた。 カロリーナは艶やかな赤い唇を指の腹で押さえ、笑いを堪えるように言う。

「自分のことは何でも自分でできたあなたと違って、 ステファンは十歳になるまで、 ろくに話すこ

ともできなかったのよ?」

「なんでと言いたいの 言葉を習得できないのかしら。 ? そうね、 人間って不便よね」 それはわたしも不思議だわ。 どうして他人に話しかけら

套の袖を握りしめ、 にっこりと笑うカロリーナを見て、エリーゼはぞっとした。 震えを抑えるために歯を食いしばる。 ずっと掴んだままだったリー のがい

怯えたような目で自分を見つめるエリーゼに、 カロリー ナは微笑みかけた。

立つと言ったのに、 んて面倒なことをやらなくて済んだのよ。エイブリーとは違って、 「顔色が悪いわ、 きっといつか、お父様のお役にも立つと-エリーゼ。どうしたの? 嬉しくないの? あなたがいてくれたから、 わたしはステファンよりも、あなたの方がずっと役に 私はステファンに言葉を教えるな わたしはあなたを評価している

「……どういうこと?」

「 ん ? 何かしら?」

「どうして私がいたから、 ステファンお兄様が言葉を覚えられたの?」

そのこと」

わたしやお父様に言葉を教わったのだと思ったみたい。 涙ぐましい努力よね。そして四歳下の妹が自分よりも流暢に読んだり話したりしているのを見て、 「ステファンは、あなたがリールに絵本を読んであげているのを聞い カロリーナは何でもなさそうに言う。 だからあの子はあなたが嫌いなの。 今でも殺したいほど恨んでる。 きっと死にたいほどの屈辱だったでしょう て、言葉を覚えたらしいのよ。 一方的にね」

カロリーナは、 口角を吊り上げた。

可愛らしいくらい滑稽よねえ!」

少女のように甲高い笑い声をあげたカロリ ナを見て、 エリ ーゼは身を震わせた。

エリーゼが呼びかけると、 カロリー ナはぴたりと笑いを止めて首を傾げる。 未だ笑いの名残があ

るカロリーナの目尻を見すえながら、 エリーゼは吐き捨てた。

「あなたは悪魔だ」

「あらあ」

カロリーナは楽しそうに唇を舐めた。

「今ごろ気づいたの? そうよ。 わたしは魔族なの」

そして顔を歪め、 湿った赤い唇が、 がたりと音を立てて席を立った。 艶々と輝く。 それを見て、姉の言葉は真実なのだろうとエリーゼは直感する。

26

「どこへ行く気だ? エリーゼ」

エイブリー が鋭い声で問う。

らっしゃるお兄様たちの代わりにね!」 「ステファンお兄様を迎えに行きます。 心配だとか、 可哀想だとか、そういう感情がないようでい

エリーゼは乱暴に扉を開けて部屋を出た。 だが数歩も歩かないうちに、 エイブリー に肩を掴まれ

止められる。

「放して!」

「何を考えている?」

「何って-

かと思っていたが、あれは演技だったようだな。 「今までお前は、 何にも関心を持っていないように見えた。何もせず、 お前の目的は、 一体何だ」 何も求めない。 ただの

「……演技? お兄様が何を言っているのか、わからな

目を瞠るエリーゼを、 エイブリーは問い詰める。

の態度は演技だったのだろう。お前は何を企んでいる? くわせばすぐに逃げていた。それなのに、 「ステファンに怯えていたはずだ。そして俺にも。 今こうして俺と視線を合わせている。 いつもおどおどして目を合わせず、 慕っていたはずの姉上に、 つまり、 どうして反抗 これまで

までハイワーズ家に敵対するつもりじゃないだろうな」 的な態度をとる? あれだけ険悪な仲だったステファンと会って、どうするのだ? まさか、

その毒電波」

「どくで……?」

「寒気がする。なんでお兄様がそんなふうに考えるのか、 私には全然わからない

エイブリーは怯んだようにエリーゼの肩から手を離した。

強く掴まれていたために痺れた肩を手で庇いながら、 エリーゼは首を横に振る

アンお兄様が受けた仕打ちを知ったら、 「さっきのお姉さまの話を聞い て、 お姉さまを好きでいられるわけがないじゃない。 同情するのは当たり前でしょう? ……なんで私、 それにステフ

気づかなかったんだろう」 震える手で頭を押さえた。

エリーゼは顔を歪めて、

る人だなんて、知らなかった。ステファンお兄様が十歳になるまでしゃべれないくらい放置されて 「……ありえないくらい、 私の目には何も映ってなかった。 お姉さまがあんなに残酷なことを言え

たことにも、気づかなかった」

ショックのあまり吐き気を覚えて、エリーゼは喉元に手をやった。

る時は見下し、ある時は蔑み、ある時は怒りをぶつけてきた。だがエリーゼはその全てを、 思い返してみれば、ステファンと会話する時はいつも、ステファンの方から話しかけてきた。 て扱ってきたのだ。 いずれは元の世界に帰るのだと、 なんとなく考えていたから。

てそんなことをしているのか、正直に話せ」 いなかったんですよ。私はお兄様が言ったように、全てのものから目を逸らして生きてきたから」 「どうして目を逸らしていた?をして、どうして目を逸らすのをやめた? 「私がステファンお兄様を、 わざと無視していたとでも思っているんですか? お前が何を目的とし 本当に、 気づいて

「目的なんてない。ただ、知らず知らずのうちに自分が変わっていくんですよ」

ろしいことが起きる」 「自分の意思ではないとでも言うのか? 何かに操られているのではないか? どうしてそんな恐

怪訝そうなエイブリーを見て、エリーゼは少し笑う。

「お兄様は、そういう思いをしたことがないんでしょうね。でも……」

輝くばかりの美貌。エリーゼとは似ても似つかない。 エリーゼはエイブリーの顔をまじまじと見た。エリーゼよりも少し深い小豆色の髪に縁取られた、

じゃないなら、わからないかもしれませんけどね」 気づいたら別人のようになっている。 「変わりたくない のに、生きているだけで変わってしまう。昔の自分に必死でしがみついてい 人間なら、 きっとよくあることですよ。 お兄様が人間 ても

「……そうだな。俺にはわからない」

「姉さん、 「リールにはわかってほしいから、 廊下に出て二人のやりとりを見ていたリールに目をやり、 人間じゃなくても、 理解できるんだって信じたいけど」 エリーゼはくしゃりと顔を歪めた。

「止めないでよね、リールまで」

を得ません。姉さんはボクよりもステファン兄上を優先するんですか?」 「ですが、姉さんが人質として教会に捕まったら、ボクは姉さんを助けるために教会に近づかざる

「リール、それは違う」

「何が違うんですか? ボクより兄上を選ぶということじゃないんですか?」

「お願いだから、そんなこと言わないで」

エリーゼの目に涙が浮かぶ。

「泣くのはやめてください。卑怯ですよ」

「じゃあ泣かないから、聞いてよ!」

涙を堪えながら、エリーゼは顔を真っ赤にして訴えた。

「吐き気がするの。このままじゃ自分が嫌いになりそう。 お姉さまでもお兄様でもステファンでも

なく、私は私に腹が立ってる」

意味がわからず呆然とするリ リールに、 エリーゼは唸るように言う。

わかってるよ。だけど何かしたいの、自分にできることを」 たいと思ってしまう。そんな私がステファンに何かをしてあげたいなんて考えるの、 「私のことなんかどうでもいいから街の外へ逃げてって、リールに強く言ってあげられない。 リールが私が死ぬとわかっているのに街の外へ出ようとしたら、 きっと私はまたリールを殺し おかしいのは だっ

「やっぱり姉さんは、

ボクよりステファン兄上を優先して

「違うって言ってるでしょ! 男の子なんだからぐちぐち言うな!」

「……ものすごく横暴な論理ですね」

とにかく今すぐステファンに会いにいく その後のことは、 ステファンに会って

殴ってから考える!」

「さっきから、ステファン兄上を呼び捨てにしていますが

「妹にこんなに心配かける兄に、 様なんて付けるわけないよ!」

「意味がわかりませんが、 姉さんが本気で言ってるということだけはわかります」

かバカにされてる気がする!」

「気がする? おかしいですね。はっきりバカにしたつもりなんですが.

思わず叫んだエリーゼに、リールは諦めたように微笑みかけた

ステファン兄上を殺しますよ。ボクが姉さんをそれなりに心配しているということを、 「姉さんがそうしたいというのなら、止めません。ですが、姉さんが危ない目に遭ったら、ボクは 忘れないで

ください。 教会に捕まって拷問されても、 自害したりしちゃだめですよ」

「拷問!!」

タイターリスはまだしばらく迷宮にいると思うので、 猶予はあります。 彼が迷宮を出て教

会に告げ口する前にステファン兄上を連れて帰ってくれば、大丈夫でしょう」

「そうだな。 もしもステファンを連れ戻せるなら、 それが一番上等だ。 ……恐らくステファンは人

間だろう。 人間以外の種族は、 好き好んで教会へ通ったりはしないからな」

「……ステファンは人間で、お姉さまは魔族。 じゃあ、 お兄様は?」

「半分は人間だ」

エイブリーは低い声で言った

もう行け。 俺は父上のところへ行く」

「わかった。ステファンは絶対に取り戻す」

握りしめた拳を胸に当てたエリーゼを見て、エイブリーは目を瞬かせた。

「人間というのは、 本当に変わるものなのだな。 なんだ、 そのやる気に満ちた顔は。 あの意志の弱

そうな目はどこへやった? 本当に演技ではないのか? 全く理解できん」

「他人を理解できない俺、 カッコイーみたいな? ……異種族だからっていうより、 ただの中二病

なんじゃないの」

「……なぜだろうな。意味はわからないが、 腹が立ってきた」

「ぎゃあああああああ! 痛い痛い痛い痛い」

頭を鷲掴みしてくるエイブリーの力強い手から逃れると、エリーゼは脱兎のごとく駆け出した。

「ごめんなさいね。 ステファンが会いたくないと言っているのですわ」

教会を訪れたエリーゼを出迎えたのは、 白い服を着た聖女だった。

長い銀色の髪と、 紫水晶のような目を持つ美しい少女。 言葉とは裏腹に、 その優しげな微笑みか

らは罪悪感などまるで感じられ

隣に立つ姉の顔を見上げる。 そん な聖女に少し違和感を覚えつつ、 エリーゼは姿を見せない兄に苛立って舌打ちした。 そして、

を追い かけて来たのだ。 ルのカードを作っ てくれそうな人物に手紙を出し終えたカロリ ナは、 後宮を出たエ ij ゼ

「……お姉さま」

「そんな恨みがましい 顔でわたしを見ては V やよ、 工 1] ぜ。 きっとあなたが いるから、 ステフ ア

ンは出てこないのだわ

「お姉さまがいるせいでもあるんじゃな い 0

「そうかもしれないわね。 でも手紙を出 T てしまったら、 後はやることがなくて暇だった

カロリーナは不機嫌なエリーゼをからかうように笑う。

敵情視察もしておきたかったのよ」

教会を敵とおっしゃるの?」

聖女が薄紫色の大きな瞳を震わせて、 エリ ーゼたちを見る。

エリーゼは咄嗟に首を横に振ったものの、 カロリー ナは平然と言い った。

て教会に閉じ込めて、 「ええ。 だってわたしの弟を、前の聖女と二代にわたって誑かしているじゃない 家族にも会わせないのだから、 敵と言えるでしょう?」 O_{\circ} その上こうし

かしているだなん て、 人聞きが悪いですわ」

間諜のまねごとをするためだって。」ねえ、こんな噂があるのをご存じ? するのは当然ではなくって?」 手駒にしていると聞いたわ。弟が悪い道に引きずり込まれてしまうのではないかと、 「大体シーザリア王国の王女が、どうしてアールジス王国の王都で聖女などやってい のまねごとをするためだって。その可愛らしい容姿で男を誑かして、王宮の情報を探るための あなたが聖女をしているのは精霊神への信仰ゆえでは るの 姉として心配 なく、

ナはけろりとして、 「心配」と聞いて、エリーゼはカロリーナに胡乱な眼差しを向けてしまった。 自分より頭一つ分小さい聖女を見すえている。 だが、 当 0) 力 口 IJ

無言で睨み合う二人が醸し出す重苦しい空気に耐えかね、 エリーゼは 口を開 い

「えっと、 聖女様は……王女様なんですか?」

理のないこと。そのせいで、生来の品の悪さが出てしまっているのでしょうね」 テファンのお姉さまのお気持ちはわかります。 「……ええ。国よりも神に仕えることを選んだから、わたくしはここにいるのですわ。 大事な弟が帰ってこないとなれば、 動揺するのも無 です

聖女は、 にっこりと微笑んだ。

だったが、 リーゼは反射的に微笑み返した後、 目は笑っていなかった。 隣に立つ姉から殺気を感じて振 りかが 力 口 IJ ナは笑顔

「ステファンのお姉さまは、 まるで魔物に魅入られたかのように夢中になっていると聞きましたわ とても強い 【魅了】 の恩恵をお持ちなのでしょうね。 あなたの周りの

「同じ言葉を返すわね、 弟がいつになったらうちに帰って来るのか、あなたの大好きな精霊神に聞いておいてくださら 聖女シルフローネ。 わたしの弟も、 魔物に魅入られてしまったみたいだも

うにカロリーナは聖女から顔を背けると、微笑み合う二人の姿を見て、エリーゼは リーゼは エリーゼの腕を掴んで言う。 顏 を引きつらせ、 後ずさった。 それを合図としたかのよ

「一旦引き上げましょう、エリーゼ」

「でも」

拝なさっていただきたいですわ 「ゆっくりしていってください な。 あなたたちが精霊に対して愛と敬意をお持ちなら、

また後で来ます。ステファンにも、 そう伝えておい てください

赤い爪が腕に食い込むほどの力で引きずられながら、 微笑みを浮かべて頷く。 エリーゼは聖女を振り返って言った。 する

おりますわ」 「あなたとは、 お話ししたいことがあるのですわよ、 エリー ぜ。 だからケーキを焼いてお待ちして

ケーキと聞い んで飛び上がりながら、 て目の色を変えたエリーゼの腕に、 エリーゼは姉に引かれるまま歩く。 カロリ ナは思いきり爪を立てた。

車に乗り込むや否や、 やがて大通りに出ると、カロリーナは少人数乗りの小綺麗な辻馬車を呼び止めた。 口を開く。 そしてその馬

「ステファンは、 やっぱり人間で間違いないわ。 あんな気分の悪いところにいられるんだもの

「え、あの、お姉さま……」

御者に聞かれてはまずいと思い、エリーゼは慌てた。

「大丈夫よ。この御者は、わたしの恋人の一人だから」

ていたことだけれど」 「とにかく、魔族であるわたしが教会に立ち入るのは無理ね。 その顔には何の感情も浮かんでいない。エリーゼが思わず身震いすると、 地味ながら整った顔立ちをしていた。彼はエリーゼの視線に気づいたからか振り返った 特にあの聖女がいるうちは。 カロリーナは笑った。 わかっ

「……わかっていたのに、なんでついて来たんですか?」

できたでしょう? あの女はね、 「あの女がどういう人間なのか、 あなたに教えるためよ。先ほどの会話を聞いていて、 前からハイワーズ家を良く思ってないの。 先代の聖女の件があっ 大体は理解

「先代の聖女?」

せようとしたり、 の頃から、 ハイワーズ家には人間でないものがいると、勘づいたのかもしれないわね。 に惜しみない援助をしてくれたわ。だけど、その後すぐに聖女をやめさせられたみたい。そしてそ 「ステファンに恋をした、 ハイワーズ家は教会に目を付けられているの。理由はわからないけれど、もしかしたら 今の聖女 愚かなおばさんのことよ。年甲斐もなくのぼせ上がって、 シルフローネがわたしの恋人を教会に引き入れようとしたり、 屋敷に間者を潜り込ま ハイワーズ家

たい放題だわ_

いことなんじゃ?」 「シルフローネさんって、 他国の王女様でもあるんですよね? 彼女を敵に回すのって、 相当まず

女はそう簡単に手出しできないの。下手をすれば国際問題になりかねないし。 教会の権限はまだそこまで強くないわ。だから爵位を持つお父様と騎士であるエイブリーに、 血を吐くのかしら?」 リーゼ、ステファンとリールの四人よね。 の女の母国であるシーザリア王国は、 王権ごと教会に取り込まれつつあるけ わたしがこの街から出ようとしたら、 問題は、 れど、 やっぱりあなたは この わたしとエ あの では

「……お姉さまは私が血を吐こうが、出て行く時は出て行くんでしょ?」 エリーゼが憮然として言うと、 カロリーナは目を細めた。

「そんなことを言わないで、エリーゼ。わたしのことが嫌いなの?」

「前は好きでした。でも今は、好きでも嫌いでもありません」

わたしが美しいから許してくれている、 といったところかしら?」

白く美しい指でエリーゼの顎をとらえ、 カロリーナは顔を寄せた。甘い花の匂いがして顔をしか

【美貌に弱い】だなんて、 そうでなくては許さないわよ、 本当に面白い恩恵よね。 エリーゼ」 【胃弱】 とい V きっと意味があるんだ

やがて貴族街の端にあるハイワーズ家の屋敷の前で、 馬車が停まった。 カロリー ナが降りると、

馬車はエリーゼを乗せたまま後宮に向かって進み始める。

車輪が石畳の上で跳ねる音を聞きながら、 エリーゼは溜息を吐

「誰が味方で、誰が敵なんだか」

でエリーゼとパーティを組み迷宮に潜っていたことを、 後宮に戻ったエリーゼを、女官長が待ち受けていた。 女官長は知っていたのだ。 ハーカラント王子がタイター

してエリーゼだけ迷宮から出てきたのかと、しつこく聞いてきた。 タイターリスに冒険などという危険な行為をやめさせたいらしい彼女は、なぜタイターリスを残

会へ向かった。どうせタイターリスから情報が漏れるだろうが、少しでも時間を稼ぎたい。 理由を言えるわけがない。 エリーゼは【逃げ足】の恩恵を使って女官長を振り切 り、 再び教

飾られている。 に少し傷があり、 に比べると、いささかこぢんまりとしている。整理整頓されていてゴミーつないが、テーブル 教会に着いたエリーゼは、礼拝堂の奥にある一室に通され、テーブルについていた。 生活の跡が見えた。棚には幼い頃の聖女とその家族らしき人々を描いた肖像 後宮の私室 の角 画が

しばし部屋の中をきょろきょろと見回していたエリーゼは、 薄汚れた布に目を留めた。 化粧箪笥の上に無造作に置かけにいる れてい

「……雑巾?」

よく見ようと腰を上げかけたエリーゼの鼻先に、 銀色の軌道が描かれる。 直後に鈍い い音がしたの

クを投げた格好のまま、にっこり微笑んでいる。左手には、クリームケーキの載ったお盆を持って 次いでフォークが飛んで来た方向に目をやれば、部屋の入口に聖女が立っていた。右手でフォー

「触らないで欲しいのですわ。わたくしのとても大切な、 思い出の品ですの」

エリーゼは無意識のうちに短剣を抜こうとしていた自分の右手を、左手で抑えた。

恩恵は働かないようだった。自分に危害を加えかけた相手を睨みつけそうになるのを堪えて、キッット 聖女は美しい顔立ちをしているが、 ・ゼは謝る。 まだあどけないためか、エリーゼの【美貌に弱い】という エ

-----ごめんなさい」

「いいのですわ。あなたが知るはずもないことですものね」

できるだけ早くステファンを取り戻さなければならない。ハイワーズ家の中で今、 微笑んだまま言った聖女に、エリーゼは愛想笑いを返す。教会と揉め事を起こしてはいけないし、 教会に容易に近

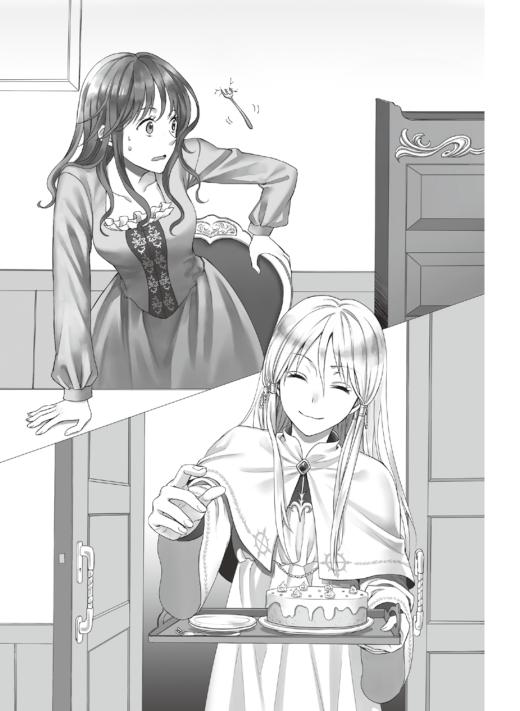
「えっと、聖女様……?」

づけるのは、

人間であることが明らかなエリーゼだけなのだ。

「せっかくのお茶会ですもの。 そう他人行儀になさらないで。名前で呼んでくださればよろしい

「じゃあ、オリヴィエ様――



エリー ・ゼの胸の奥がざわつく。殺される前に殺したいという衝動が湧き上がってくる。 とナイフが突き刺さった。エリーゼがテーブルの上に置い ていた手のすぐ近くに。

(殺しちゃいけない、殺しちゃいけない……!)

表情が歪むのを抑えられないエリーゼに頓着したふうもなく、 聖女は微笑ん んで言う。

してあなたがご存じなのかしら。きっとシーザリア王国について、よく勉強していらっしゃるので 「その名前は、親しい方にしか呼ばせていないのですわ。この国では公表していませんのに、 どう

水晶玉のような菫色の目を細めて、 聖女はそう決めつけた。

かった名前なのです。 「わたくしは聖女となってからは、 これからは、 シルフローネと呼んでくださいませね?」 シルフローネと呼ばれているのですわ。 精霊神アスピルから授

「……シルフローネ、

エリーゼが呼び名を改めると、 シルフローネはにっこりと微笑んだ。 エリーゼは首を傾げ

「シルフローネ様って、タイターリスと親しいんですか?」

「なぜそう思うのかしら」

前を知っているんです」 「タイターリスが、シルフローネ様のことをオリヴィエって呼んでましたから。 だから私もその名

それを聞くと、 シルフローネは年相応のあどけない微笑みを浮かべた。

「……そうよね、 わたくしの方がタイターリス様に近しいのだから、 焦ることはないですわよね」

ひとりごちているシルフローネに構わず、 エリー

「ところで、私にお話があるとのことでしたが」

「タイターリス様のことですわ」

シルフローネはきっぱりと言った。

「わたくしと張り合おうなんて、 思わないでくださいませね

エリーゼは元の話題に戻ってしまったことにがっかりしつつ、 ひとまず頷いた。

どうやらシルフローネは、タイターリスのことが好きらしい。

知っているのだろうか。知っているのだとすれば、 シーザリア王国の王女として、

妃になることを望んでいるのかもしれない。

(恋してるのが丸わかりで可愛いけど、 勝手にライバル視されてるみたいだし、 それになんだ

居心地が悪い。 それを誤魔化すようにお腹をさすると、 エリーゼは口を開 いた。

の安らぎを得ているのでしょう」 「彼は難しい悩みを抱えているようですわね。 「私はタイターリスと、それほど仲が良いわけじゃありません。 今は家族が心配なんです。こちらでお世話になっているステファンのことが」 だから今は精霊神アスピルに心を委ねて、 別に悪くもないですけど。 V そんな つとき

「話がしたいので、 会わせていただけませんか?」

「わたくしたちは、

彼を閉じ込めているわけではありませんわ。

あなたがお姉さまと一緒にい

41

タイターリスがアールジス王国の 第 40

すぐステファンに伝えましたのよ」

その時の兄の反応が想像できたので、 エリーゼは肩を落とした。

「……何か言ってました?」

「よりによって、 どうしてあなたが来たの か ع

「そうですか……言うだろうとは思ってたけど、 腹立つなあ

がら溜息を吐いた。 母はずっと臥せっていて動けない。父は動くような人じゃない。 教会に来れるのはエリーゼだけなのだから、 仕方ないのに。 エリ 姉弟は恐らくみんな人間じゃな ーゼは頭をくしゃりと掻きな

「では、伝言をお願いできますか?」

「よろしいですわ。 ただし、 今回限りですわ

「ありがとうございます。 ハイワーズ家に厄介事が起きたから、 すぐエイブリー 兄上と連絡をとる

ように、と伝えてください」

「困り事がおありなのでしたら、 ご相談に乗りますけれど?」

「ご厚意に感謝します。ですが、 これはハイワーズ家の問題なので」

エリーゼはそう言って頭を下げた。

そうですの?」

小首を傾げてみせるシルフロー エリーゼはシルフローネとのお茶会を楽しめたかもしれない ネは可愛らしく、 エリーゼは思わず笑みを浮かべた。

ち上がった。 シルフローネが用意してくれた爽やかな酸味のあるチーズケーキを食べ終えると、 エリー

「お暇します。 ケーキごちそうさまでした。美味しかったです」

「わたくしの手作りですのよ。タイターリス様は気に入ってくださるかしら?

「さあ……味の好みを知るほど親しくはないので」

エリーゼの言葉を聞き、 シルフローネは満足そうに目を細めて笑った。

を平気で口にしたんですもの。あなたはきっと人間なのですわね、 「今日のところは見逃してさしあげますわ。……精霊神アスピルが清めた聖水入りのお茶やケーキ エリーゼ。 当てが外れてがっか

ぎくりと肩を揺らしたエリーゼを見て、 シルフローネは笑みを深めた。

も少し疑っていますわ。 らないのかしら」 かその眷族ではないかと。 「わたくし、あなたは絶対に人間ではないと思っていたんですの。タイターリス様を誑かす、 でも、もしあなたが人間なのだとしたら、なぜわたくしの 聖水をもってしても、 確実に正体を暴けるわけではありませんから、 【魅了】にかか

欲しい玩具が手に入らなかったことを嘆くような言い方に、 エリー ゼは息を呑んだ。

怯むエリーゼを見上げて、 シルフローネは可愛らしく微笑む。

「あなたが人間でなければ、 タイターリス様につく悪い虫を、 精霊神教会の名のもとに一匹駆除で

きましたのに」

「……そんなふうに脅さなくても、 私はシルフローネ様から、 タイターリスをとったりしませ

44

「そうかしら? 信用できませんわ。 それにわたくしの言葉は脅しじゃなくて、 本心ですの

シルフローネに見送られて、エリーゼは教会を後にした。 そうですか、 と気のない相槌を打ってから、エリーゼは部屋を出た。 教会の出口までついてきた

顔に貼りつけていた愛想笑いは、 途端に剥がれ落ちる。

「家族が人間じゃないから、そしてタイターリスと近しいから、 あの子はそのうち私を殺すか

往来で頭を抱えて、エリーゼは溜息を吐いた。れない。そうなる前にあの子を殺したいけど――

殺したら教会だけでなく、 シーザリア王国まで敵に回しちゃうかもしれない

ず何よりも、 倫理的にだめだって」

波立つ心を鎮めようと、 エリーゼは深呼吸を繰り返した。

「でも、 いつか……」

白い教会の屋根を見上げながら、エリーゼは呟く。

「私のことを殺したがってる、 あの子を殺さなきゃ」

聖女から伝言を聞いたステファンは、 薄暗い部屋で一人毒づいた。

なんでよりによって、 またあの子なんだ」

そして机の上の木屑を、 乱暴に払いのける。

「あの子以外なら、 誰でも良かった。それなら僕は家に戻ったのに」

握る。 エリーゼの言葉だけは、 素直に聞き入れることができない。 ステファンは衝動的に彫刻刀の 刃を

卓上が血で赤く濡れていくのをしばし見つめて、ステファンはようやく肩の力を抜いた。

(家族会議……なんだったんだ? ハイワーズ家に何が起きた?)

ステファンは掌を横断する傷を見て項垂れる。感情のままに行動して後悔することが、 これまで

何度もあった。

「兄上に、 会いに行こう」

上の神像を持ち上げた。

持っていたハンカチを細く畳んで掌に巻きつけると、

ステファンは怪我をしていない方の手で卓

家に戻らずとも、 エイブリーに会えば詳細を教えてもらえるはずだ。

そう決めると、 片手とはいえ慣れたものだ。 ステファンは片手で彫刻刀や鑢などの道具をまとめ始めた。 一呼吸もしないうちに終わらせて袋を小脇に抱え、 それらを袋に包む動 ステファン

彼が教会の玄関ホ ルにたどりついた時、 そこには聖女が立っていた。

聖女様

一行ってしまうのですね

いくだけです」

頷がた。 エリー ぜの言葉に従ったと思われるのが嫌でそう返したが、 聖女はさして気に留める様子もなく

一今は非常事態です わ。 ご家族が揃っていた方がよろしいかもしれませんわね

「悪霊は、 まだ退治されていないんですか」

いのですわ」 「ええ。恐ろしいことに。 もう現れないかもしれませんけれど、 今すぐここに現れないとも限らな

でもあるのだ。悪霊に憑かれた人間が、母を害する可能性もあった。 悪霊は心の弱い人間に憑くという。母は精霊に愛されているが、心を病んで臥せっている弱い家族会議は、母上の警護について話し合ったのかもしれないと、ステファンは思った。

(僕だって強くない。悪霊が僕に憑いたら、父上はどうするだろう)

堪えつつ、 その結果を想像するのは簡単だったが、あまりにも辛い。ステファンは顔が 木彫りの神像を聖女に手渡した。 歪みそうになるのを

精霊神アスピルの像の雛型です。 今度お訪ねする時には、 細部 について話を詰めたい

「ええ、 楽しみに していますわ

聖女は目を細め、 ステファンの手に巻かれ た 血の滲むハ ンカチに触れる。

「白く涼やかな癒しの風」

魔法でたちどころにステファンの傷を癒した聖女は、 にっこりと微笑んだ。

「困ったことがあったら、 いつでもわたくしのところへいらしてね」

そして最後に、 聖女はつけ加える。

「あなたの妹さんにお会いしたけれど、 とても可愛らしい方ですのね。 あなたが妹さんと仲良くで

きるよう、 精霊神アスピルにお祈りいたしますわ」

じるが、それとは比べ物にならない。ステファンはそう思った。 るのと同じ、平伏したくなるような雰囲気をまとっている。カロリー 聖女は美しい。 エリーゼよりもいくつか年下だが、 知識も豊富だ。 何より父と相対 ナやエイブリー した時 に対しても感

欠片も思っていないことを微笑みながら口にするその姿も、 父とよく似ていた。

アーハザンタスの東南にある旧市街地バターレ イは、 いわゆる貧民街だ。

ていた。 が無秩序に並んでいる。 アールジス王国勃興期には栄えていたらしいが、 区画整理された美しい王都のつら汚しとして、 今はすっかり落ちぶれ、 裕福な平民や貴族に疎まれ 崩れかけた煉瓦 の

いなかった。 ある物を探してバターレ イを訪れたエリーゼだが、 まさかこれほどあっさり見つかるとは思っ

「……リール、 こんなところで何やってるの

「姉さん!?

どうしてここがわかったんですか?

ジ

ュナには嘘

 \tilde{o}

潜伏場所を教えておい たの ので に 7 47 46

た顔をして、

い街づくりのせいで、バターレイは昼間でも街全体が薄暗いのだ。 「それにしても、 女性一人でバターレイに来るなんて。 姉さんが来るようなところじゃありません

危ないですから、 早く出ていってください」

「危ないのはリールの方だよ」

うでは、 「確かに、 潜伏場所を早急に変える必要があるでしょうね。 身を隠さなくてはならないのはボクの方ですけど。 偶然とはいえ、 姉さんにすら見つか こうも早く見つかると って まうよ

「いや、 偶然じゃない

いないんですから」 「どこかから情報が入ったんですか? ありえません。 ボクはここに隠れることを、 誰にも言っ 7

だ十四歳の子供なんだね」 リールが久々に自分より小っちゃく見える。 リー ルは頼りになるけど、 やっぱりま

むすっとしたリールを見て、エリーゼは苦笑した。

ない。 「情報なんてなかったよ。けど私がバターレイに来て、 これがどういう意味だか、リールならわかるよね」 ルを探し始めてから三十分しか経っ

エリ ゼはそう言って、 バーの外を見回した。

かき傷のような模様が付けられていて、その家の主がバターレイのどの派閥に属しているかを表し人が住んでいる建物の窓には、壊れた硝子の代わりに銅板が打ちつけられている。銅板には引っ ていた。バターレイに住む人間なら、文字を知らない子供でさえ、その意味を知って W

まさか姉さんは、昔から出入りしていたんですか? こんな汚い街に」

て来るから」 「物乞いをするなら、この辺りが一番なんだよね。施しをしようとする人たちは、 大体ここにやっ

「危ない目に遭ったことはないんですか?」

「昔は売られそうになったりもしたけど」

ていないようで、 こちらを窺う無数の視線を、 ただエリーゼの真意を探るように彼女の顔を見つめている。 エリーゼは 【気配察知】 の恩恵で感じ取っていた。 IJ ル は気づい

「とりあえず、 場所を移そう」

エリーゼは肩を竦めた。

直について来るのを見て、その手を強く握った。 そしてリールに荷物を持たせ、 エリーゼは彼の手を引く。 リールが不機嫌そうな顔をしつつも素

べながら左右を見回した。 縄張りに侵入してきた彼らを、 建築基準など完全に無視した歪な建物群の間を、 ボロを着た子供たちが睨みつけてくる。 エリーゼとリールは歩き続けた。 エリーゼは愛想笑いを浮

立ち読みサンプルはここまで

「……うちの弟が、暴言を吐いてごめん」 「こんなお貴族様のお目汚しにしかならない貧民窟へ、ようこそいらっしゃいました。 すると探し人は向こうから姿を現し、エリーゼに痛烈な皮肉を浴びせかけ ってな」

弟の躾がなってないぜ、 エリーゼ・アラルド・ ハイワーズ」

「ごめんってば」

なっていった。 確な年齢は本人も知らない 短く刈り込まれた灰色の髪と、 出会った時には黒だった髪は、 同じ色の瞳を持つ少年。 エリーゼよりいくつか歳上だろうが、 年月が経つにつれて瞳と似た色合いに

を取り出そうとしているのに気づいて、 少年は傲然と顎を反らしながら、 エリーゼとリールを交互に見やる。 エリーゼは彼の手を軽く引っぱった。 リー ル が懐から勇者の絵本

「フィン、お願いがあるんだけど。この子を匿ってくれないかな」

から」 「イヤだね。オレ、貴族のことはありがたいカモだと思ってるけど、それ以上にダイキライだ

「私も貴族なんだけど」

「お前は絶対違うだろ」

えてしまい、反論できなくなる。 一……とりあえず、 エリーゼは少年 頼む。 **ーフィンから胡乱な眼差しを向けられたが、** お願い!」 そんなエリーゼを見て、 リールがフィンを強く睨んだ。 その遠慮のない言動に親しみを覚

「ハイワーズ家って今さ、精霊神教会とごたついてるじゃん。 厄介事に巻き込まれ h のはゴメ

「古代文字、教えてあげないよ?」

「それは困る」

エリーゼの言葉を聞いて、 フィンは少し弱ったように眉尻を下げた。

「あれ、勉強しても勉強してもなかなか覚えらんないんだよなー」

「才能がないんでしょう」

リールが、フィンを睨みつけたまま口を挟んだ。

にしか理解できないんです。あなたには、 です。それをマスターすれば、世界の規則を歪めることすら可能になる。だからこそ、選ばれた者 「スゲェ力がある文字なんだよな。もう十年近く勉強してんのにろくに身についてないってことは 「古代文字は、ただの文字ではありません。魔法文字であり、 その資格がないんですよ。諦めたらどうですか?」 世界の規則を記すことのできる文字

才能ないのかもな」

匿われても、 「今周りにいるヤツらのうちの誰かが、告げ口するとでも思ってんのか?」 「姉さん、ボクはこの男を信用できません。心配してもらえるのは嬉しいですが、 フィンが挑発をあっさり受け流して笑ったので、リールは苦虫を噛み潰したような顔をした。 そう言ってにやりと笑うフィンを完全に無視して、 すぐに見つかるのがオチでしょう。今もたくさんの人間に見られているわけですし」 ルはエリーゼを問い詰める。 こんなところで

リー